

日本アメリカ史学会 第 57 回例会報告

「歴史の中の感情を描く 感情史とアメリカ史」

日時:2023 年 7 月 22 日(土)14:00-16:30 会場:オンライン開催(Zoom)

概要:

第 57 回例会は、「歴史の中の感情を描く 感情史とアメリカ史」と題して、近年日本でも注目が集まる感情史とアメリカ史の対話を試みる機会として企画された。本例会では、まず保守主義を専門とする森山貴仁氏と感覚史という分野を開拓する久野愛氏にご報告いただき、次いで日本における感情史研究を牽引する伊東剛史氏、アメリカ社会史・思想史を専門とする佐々木一恵氏にそれぞれコメントしていただいた。森山貴仁氏の「不合理の合理——アメリカ保守主義運動と感情」と題した報告では、保守派研究と感情史研究の関係について概観した上で、1970 年代のニューライトによる感情動員についての分析が行われた。ダイレクト・メールを用いた政治マーケティングを開拓した政治コンサルタントであるリチャード・ヴィグリーによる政治広告が俎上に上げられ、レーガンによるパナマ運河返還反対運動を事例に、受け手の負の感情を喚起することで保守層の行動や政治献金を促すメッセージ戦略が行われていたことが示された。負の感情という非合理性を意図的かつ効果的に活用して保守主義運動を動員した様子が示され、今日のトランプ支持者の政治動員との類似も指摘された。久野愛氏は、「消費主義社会拡大にみる感情と身体史——1930 年代日本におけるアメリカ的百貨店の導入と近代化する笑顔」と題された報告において、まず感情とも重なる歴史的構築物として感覚(感覚的・感性的認識)を歴史的に分析するための研究枠組みを提示し、その実践として、アメリカのデパートを参考にしつつも独自の展開を遂げた 1930 年代の日本のデパートにおける食堂ガールと呼ばれた女性労働者の身体実践や消費者による受容を分析した。歯を見せる笑顔や表情といった、感情的表現を伴うそれまでにない身体実践が普及していくことで、食堂ガールが近代的女性像として表象されていったことを論じた。

伊東剛史氏によるコメントでは、二つの報告に共通に見られる特徴として、ある時代の社会の中で感情がいかんして変化し、いかに政治を動かし、動員されたのかという問題関心を指摘し、情動伝染や感情体制・感情規範・感情実践といった分析概念を取り上げ、感情史の分析方法を提示した。佐々木一恵氏は、19 世紀アメリカにおけるロマン主義と感情の関係を取り上げながら、感情の分析方法として、インテレクチュアル・ヒストリーの観点からコミュニケーションの構築や共感の創造を論じる可能性を示した。質疑応答では、非西洋やアメリカにおける感情の歴史を取り上げるにあたっての相違点などが議論され、アメリカにおける感情の歴史を掘り下げていくことの必要性と可能性を存分に示す会となった。

文責 運営委員(鰐淵)